

『万葉集』から見る 日本の古典

獨協大学特任教授 城崎 陽子

真間手児奈 その1

先回まで『万葉集』の「浦島子」が「浦島太郎」として御伽草子や、さらには国定教科書などにも採録され、広く享受されたことを記してきた。今回は『万葉集』の巻三と巻九に載る「真間手児奈」の歌を取り上げ、手児奈の伝説が、文学史の中でどのように扱われているかをみてみたい。まずは、作品を掲げる。

葛飾の真間の娘
子が暮に過る時に
山部宿禰赤人が
作る歌一首「并
せて短歌、東の俗
語に云ふ、かづし
かのままのて。」

古にありけむ人の
倭文機の帯解き

交へて廬屋立て
妻問ひしけむ葛飾
の真間の手児名が
奥つきをこことは聞
けど真木の葉や
茂りたるらむ松が
根や遠く久しき
言のみも名のみも
我は忘れまじじ
(巻三・四三二番歌)

反歌

我も見つ
人にも告げむ
葛飾の
真間の手児名が
奥つき処
(巻三・四三二番歌)

葛飾の
真間の入江に
うちななく
玉藻刈りけむ

手児名し思ほゆ (巻三・四三三番歌)

題詞にみえる「葛飾の真間」は、現在の千葉県市川市真間のことを指している。そもそも「真間」は崖を意味する言葉で、千葉県市川市真間付近の国府台の南側にある崖下が真間手児奈の伝説の地とされる。「葛飾の真間の娘」とは、この真間の地に住んでいた女性の呼称で、題詞の注に「東の俗語に云ふ、かづしかのままのて」とあるから、当時「娘」のことを「テゴ」と呼んでいたことがわかる。歌の本文中ではこれに接尾語をつけて「テゴナ」と呼称している。作者「山部宿禰赤人」は都の官人であり、何かしら用の件でこの地を訪れた際に、地元の手児奈伝説を歌に詠んだといえよう。



手児奈を祀る真間山弘法寺

歌の内容をみてみよう。「古にありけむ人」は特定の人物を指すのではな

く、「昔」の地にいた男」くらいの意味であろう。「倭文機」は日本固有の伝統的な模様がある織物を指し、その帯を「解き交へて」とは、男女の交わりを意味している。「廬屋」は簡易な住居のことをいい、こうして簡易な住居を立てて「妻問ひ」(求婚)した「手児名」の「奥つき」(墓所)が伝説を伝える縁になっていることがわかる。そして、その「奥つき」は木が生い茂り、すでにその跡すらわからなくなっているが、手児奈のことは忘れ

ないと結ばれており、反歌の内容へながっている。この手児奈伝説を今一人の万葉歌人・高橋虫麻呂が詠っている。虫麻呂は藤原宇合(藤原不比等の子)に仕えた歌人で、宇合に従って東国へ来て、手児奈伝説を知ったのだと考えられる。歌を見てみよう。

葛飾の真間の娘
子を詠む歌一首
「并せて短歌」

鶏が鳴く東の国に
古にありけること
と今までに絶え

ず言ひける葛飾の
真間の手児名が
麻衣に青衿着け
ひたさ麻を裳には
織り着て髪だにも
搔きは梳らず 沓を
だにはかず行けど
も 錦綾の中に包
める 斎ひ兒も 妹に
及かめや 望月の
足れる面わに花の
ごと 笑みて立てれば
夏虫の 火に入るが
ごと 湊入りに 船
漕ぐごとく 行きが
くれ 人の言ふ時
くばくも 生けらぬ
ものを なにすとか
身を たな知りて 波
の音の 騒く湊の 奥
つ城に 妹が臥やせる
遠き代に ありける
ことを 昨日しも
見けむがごとくも 思
ほゆるかも
(巻九・一八〇七番歌)

反歌
葛飾の
真間の井を見れば
立ち平し

水汲ましけむ 手児名し思ほゆ (巻九・一〇〇八番歌)

虫麻呂の歌には、生前の手児奈の魅力が詳細に表現されている。「麻衣」は麻で織った粗末な衣服を指し、手児奈はこれに青い襟をつけ、やはり、粗末な麻の「裳」を着て、髪も櫛けずらず、沓もはずにいたが、その様子は錦に包まれて育った「斎ひ兒」にも劣らなかつた。ふつくらとした顔に花のような笑みを浮かべると、夏の虫が火に集まるように、港に船が次々と入ってくるように男が言い寄ってきたのである。

ところが、それほど長く生きられるわけでもないのに、手児奈は「身をたな知りて」(わが身を思い知って) 入水してしまつたのである。反歌には「真間の井」として、手児奈がいつも水を汲んでいた「井」が縁として詠われてもいる。

厄年を過ぎた 御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年一年を

七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを

八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を

九十才を過ぎたなら
一日一日を

気を付けられ
日々を大切に
圓滿にお暮し下さい

当山では皆様の
(身体健全)
(寿命長久)を祈念して
御護摩を
お申し受け致しております。

高尾山

四季の草花 終

キッコウハグマの冠毛 亀甲白熊
キク科・モミジバグマ属

葉の形が亀の甲羅に似ている事と、白い花が仏具の拵子に似ている事からこの名前があります。(ハグマとは仏具の拵子に使われている動物のヤクの白い毛のことを云います)

白い花を見る

と二つの花に見えますが、よく観察してみると、小さな花が三つ集まって形成しています。葉の形は、ほぼ五角形で亀の甲羅のように見えます。

キッコウハグマは開鎖花が多いため白く開花する花は少ないので、冠毛ができるが目立つ山野草です。冠毛は地味な茶色ですが、開いた繊細な毛は味わいがあります。

稲荷山コースを登ってきて、高尾山頂への階段や四号路あたりに見られるでしょう。

花の色が白ですが、草丈が低いので中々見つけ難い花の一つです。

(撮影・文 中村 毅人)

